

# 仁徳天皇陵古墳の訪問者の認識と行動

藤 村 健 一\*

## 1. はじめに

百舌鳥・古市古墳群は、大阪府堺市の百舌鳥古墳群と、藤井寺市・羽曳野市の古市古墳群の総称である。2019年7月、百舌鳥・古市古墳群に含まれる45件49基の古墳が、ユネスコにより世界遺産（文化遺産）に登録された。

百舌鳥・古市古墳群は6基の天皇陵古墳を含む。このうち、百舌鳥古墳群の仁徳天皇陵古墳は国内最大規模の古墳で、百舌鳥・古市古墳群に属する古墳のなかでもとりわけ知名度が高く、多くの観光客を集めている。世界遺産に登録されたことで、地元の堺市では観光客の増加や大きな経済波及効果が期待されている（堺都市政策研究所2017）。

仁徳天皇陵古墳は前方後円墳に分類されるが、これを現地で地上と同じ高さから眺めると、古墳というよりも巨大な森のように見える（図1）。現地ですその面的な広がりや鍵穴のような前方後円墳の形状を感じ取るためには、高いところから見下ろさなければならない。しかし、世界遺産の周辺には緩衝地帯（バッファゾーン）が設定されるため、高層建築を建てることはできない。仁徳天皇陵古墳から約800m離れた堺市役所高層棟の21階の展望ロビーより眺めることもできるが、やはり巨大な森のように見え、前方後円墳の形状は分からない。このように、世界遺産に登録されたことで、むしろ観光資源としての

---

\* 福岡大学人文学部准教授

利用に一定の制限がかかっている。



図1 仁徳天皇陵拝所からみた仁徳天皇陵古墳

2022年1月筆者撮影。堺観光ボランティア協会のボランティアガイドが訪問者に説明している。

仁徳天皇陵古墳に隣接する大仙公園にある堺市博物館は、VRにより上空から仁徳天皇陵古墳を見下ろす体験ができる施設を設けており、観光客の好評を博している。さらに、兵庫県の企業が、仁徳天皇陵古墳を上空から眺める観光用ガス気球の運行を大仙公園で計画している。

仁徳天皇陵古墳は皇室の祭祀が行われている一種の「聖域」であり、現在も宮内庁の管理下にあつて一般の立ち入りが禁じられている。「天皇のお墓」を見下ろすことについて否定的な意見もあり（白形ほか2013：142頁）、このことも観光資源としての利用が制限される一因となっている。

このように、仁徳天皇陵古墳には様々な側面があり、人々がこれに対していろいろな意味づけを行っていると考えられる。

筆者はこれまでの研究（藤村 2021a、b）から、仁徳天皇陵古墳をはじめとした百舌鳥・古市古墳群の天皇陵古墳に付与された主な意味として、①「観光地」、②「聖域」、③「文化財」、④「地域や国の誇りである世界遺産」を想定している。

①は主に、観光客や観光業界の担当者の立場である。地元の観光業界や商業施設からは、百舌鳥・古市古墳群が世界遺産登録に伴い観光地として発展することが期待されている。

②は主に、皇室・宮内庁や神社関係者・皇室崇敬者の立場である。天皇陵は現在、宮内庁の管理下にあつて、皇室の祖先の墓として現在も祭祀が行われ、一般の立ち入りが禁止されている。ここを聖域視する意見は、神道関係者や皇室崇敬者の間でも聞かれる。

③は主に、歴史学者（考古学者）や「考古学ファン」<sup>1)</sup>の人々の立場である。天皇陵を含む陵墓は文化財指定がなされていないが、歴史学界では天皇陵古墳も一般の古墳と同じく文化財として扱い、考古学的な調査の許可を求める意見が多い。学界では宮内庁による仁徳天皇陵の治定の妥当性も疑問視されており、世界遺産の構成資産名に「仁徳天皇陵古墳」のような被葬者（天皇）名を冠した呼称が使われたことも批判を呼んでいる（大阪歴史学会ほか 2019）。

④は主に地元で世界遺産登録推進運動に従事した自治体や、市民団体の関係者の立場である。百舌鳥・古市古墳群の世界遺産登録を進めた地元自治体は、これらは我が国が世界に誇る文化遺産であり、地域のアイデンティティの拠り所になりうると主張する。

筆者はすでに、②「聖域」としての意味づけを行っている皇室・宮内庁や神社関係者の考え方について詳細に検討した（藤村 2021a）。

しかし、①～④の意味の主な担い手として最も捉えがたいのが観光客である。一般に、宗教施設や聖域への訪問者は、そこが著名な観光地であっても、ただちに「観光客」として扱われる訳ではない。たとえば京都仏教会では、金

閣寺や清水寺などの京都の観光寺院を「拝観寺院」と呼び、これらの訪問者を「拝観者」とみなしている。実際、こうした寺院への訪問者の間では合掌などの宗教行為もみられる。宗教的な意図で観光寺院を訪問することや、訪問により心のやすらぎや癒しの感覚が得られることもありうる。また、こうした観光寺院は大半が文化財を有しており、文化財を鑑賞したり見学したりする目的で訪問する者も少なくない。

天皇陵古墳についても、単なる観光ではなく、聖域である「天皇陵」（仁徳天皇のお墓）へ拝礼したり、「古墳」を文化財として考古学的な興味をもって観察したりする目的で訪問する人たちの存在が想定される。そもそも、訪問目的が単一とは限らない。観光目的での訪問であっても天皇陵に拝礼したり、古墳として考古学的な視点で眺めたりする人もいるだろう。近隣住民が散歩で訪れることも考えられる。

歴史学ではこれまで、主に古墳を文化財や史料として扱ってきたが、古墳に対しては歴史学者以外にも様々な人々が多様な意味づけを行っている可能性がある。こうした視点からの研究も始まっているが（松田 2013、岡村 2014、2022）、まだ十分に整理されているとは言い難い。

そこで本稿では、仁徳天皇陵古墳の訪問者に対してアンケート調査を行い、同古墳に対する訪問者の認識や目的、行動を明らかにする。仁徳天皇陵古墳は百舌鳥・古市古墳群を代表する古墳であり、知名度が高く、多くの観光客を集めている。そこで筆者は、2022年1月から6月にかけて、仁徳天皇陵古墳周辺の3つの施設（百舌鳥古墳群ビジターセンター、堺市博物館、こふん前 cafe IROHA）にアンケートはがきを配置した。これらの施設はいずれも同古墳南側の大仙公園内に位置し、天皇陵の拝所<sup>2)</sup>から至近距離にあつて（図2）、仁徳天皇陵古墳への訪問者の立ち寄りが多いと考えられる。拝所は同古墳の正面にあたり、多くの訪問者が集まる場所である。アンケートの回答者は全部で174人<sup>3)</sup>である。

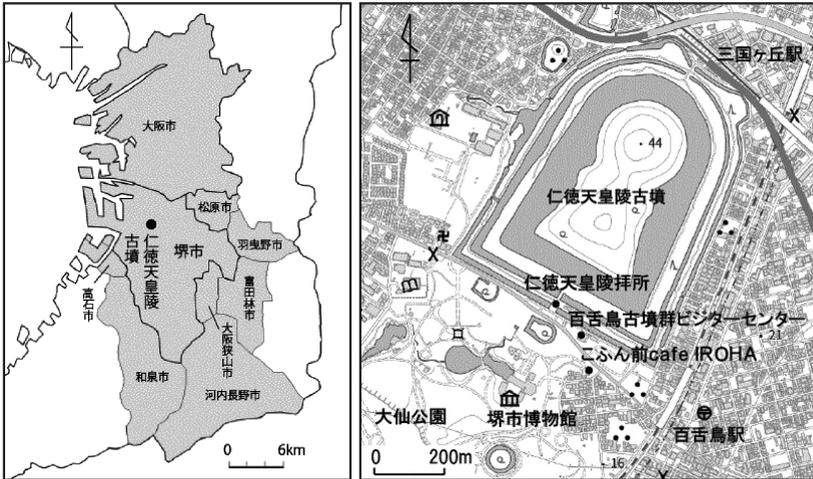


図2 仁徳天皇陵古墳の位置  
 (「地理院地図 Vector」より筆者作成)

調査を開始した2022年1月は、はからずも新型コロナウイルスのオミクロン株の感染が急拡大した時期に当たった。同月末より3月下旬にかけて、大阪府に「まん延防止等重点措置」が適用され、「不要不急の都道府県間の移動」の自粛が呼びかけられた。このことの影響については分析において留意する。

今回のアンケートでは、回答者の年齢・性別・居住地といった属性に関する質問と、仁徳天皇陵古墳に関連する5つの質問(Q1～Q5)を行った。以下、これらの集計結果を示し、その分析を行う。

## 2. 回答者の属性

年齢については161人から回答が得られた。回答者の平均年齢は53.1歳で、10代が6.2%、20代が12.4%、30代が6.8%、40代が11.2%、50代が15.5%、60代が21.7%、70代が23.0%、80歳以上が3.1%であった。性別については168人から回答が得られた。男性が47.6%、女性が52.4%だった。

居住地については169人から回答が得られた。69.8%が大阪府在住で、とりわけ地元の堺市の住民が43.3%を占める。近畿地方以外からの訪問者は20.1%であった（表1）。

表1 回答者の居住地

	(人)	(%)
大阪府	118	69.8
堺市	74	43.8
堺市に隣接する市町村*	31	18.3
大阪府内のその他の地域	13	7.7
近畿地方（大阪府を除く）	17	10.1
関東地方	21	12.4
中部地方	5	3.0
国内のその他の地域	8	4.7
合計	169	100.0

\*大阪市、松原市、羽曳野市、富田林市、大阪狭山市、河内長野市、和泉市、高石市

### 3. 回答者の行動と認識

#### (1) 仁徳天皇陵古墳を初めて訪れた時期

アンケートのQ1では、仁徳天皇陵古墳を初めて訪れた時期を「今回が初めて」、「2020～2022年」、「2017～2019年」、「2016年以前」から1つ選んでもらった。回答はおおむね「今回が初めて」と「2016年以前」に二極化した。回答を居住地別にみると、堺市居住者は2016年以前から訪れている人の割合が大きい。たびたび訪問している人が多いことが窺える。一方、大阪府以外の地域から来た人は約8割が今回が初めての訪問であった（表2）。

表2 居住地別にみた仁徳天皇陵古墳を初めて訪れた時期

初めて訪れた時期	(人) (%)		居住地							
			堺市		堺市に隣接する自治体		大阪府内のその他の自治体		大阪府以外	
			(人)	(%)	(人)	(%)	(人)	(%)	(人)	(%)
今回が初めて	68	40.2	8	10.8	10	32.3	9	69.2	41	80.4
2020～2022年	10	5.9	6	8.1	2	6.5	0	0.0	2	3.9
2017～2019年	9	5.3	5	6.8	2	6.5	0	0.0	2	3.9
2016年以前	82	48.5	55	74.3	17	54.8	4	30.8	6	11.8
合計	169	100.0	74	100.0	31	100.0	13	100.0	51	100.0

## (2) 仁徳天皇陵古墳への訪問理由

Q2では、今回仁徳天皇陵古墳を訪ねた理由を尋ねた。このなかでは、「観光」、「天皇陵への参拝」、「歴史への興味」、「世界遺産への興味」、「古墳が好きだから」、「パワースポットだから」、「自然豊かだから」、「堺市博物館のそばだから」、「散歩・散策」、「その他」という選択肢のうち、当てはまるものをすべて挙げてもらった。

先述のように、仁徳天皇陵古墳に付与された主な意味として、①「観光地」、②「聖域」、③「文化財」、④「地域や国の誇りである世界遺産」が想定される。Q2の選択肢のうち、「観光」、「天皇陵への参拝」、「歴史への興味」、「世界遺産への興味」は、それぞれ①～④の意味に対応している。「パワースポットだから」という選択肢は、近年のパワースポット・ブーム<sup>4)</sup>を受けて、天皇陵古墳もパワースポットとして認識されている可能性があると考えて設けた。

集計結果から、訪問者は多様な動機で仁徳天皇陵古墳を訪れているのが分かる。「歴史への興味」と「散歩・散策」はそれぞれ約4割の人が、「古墳が好きだから」と「世界遺産への興味」はそれぞれ約3割の人が理由に挙げている。ついで多かったのが「観光」で、25.9%の人が選んだ。このほか、「天皇陵へ

の参拝」が17.2%、「堺市博物館のそばだから」が13.8%、「自然豊かだから」が10.3%となっている。「パワースポットだから」と答えたのは4.6%にとどまった（表3）。

表3 仁徳天皇陵古墳を訪れた理由〔複数回答可〕（n=174）

	(人)	(%)		(人)	(%)
歴史への興味	68	39.1	天皇陵への参拝	30	17.2
散歩・散策	65	37.4	堺市博物館のそばだから	24	13.8
古墳が好きだから	48	27.6	自然豊かだから	18	10.3
世界遺産への興味	47	27.0	パワースポットだから	8	4.6
観光	45	25.9	その他	20	11.5

訪問理由を居住地別にみると、堺市居住者の58.1%、隣接自治体居住者の45.2%が「散歩・散策」のために訪れている。コロナ禍では「不要不急の都道府県間の移動」だけでなく、「密」（人込み）を避ける人が増えた。こうした事情を抱えた堺市や隣接自治体の住民が、近場への行楽や気分転換、ウォーキングのために訪れたことも考えられる。一方、大阪府外からの訪問者には、「歴史への興味」や「世界遺産への興味」、「観光」目的で来た人が多い（表4）。

初めて訪れた時期を訪問理由別にみると、「世界遺産への興味」や「観光」目的で来た人には初訪問の人が多いが、「散歩・散策」や「天皇陵への参拝」、「堺市博物館のそばだから」、「自然豊かだから」を挙げた人には、2016年以前から訪問している人が多い（表5）。

表 4 居住地別にみた仁徳天皇陵古墳の訪問理由

仁徳天皇陵古墳を訪れた理由 [複数回答可]	居住地							
	堺市		堺市に隣接する自治体		大阪府内のその他の自治体		大阪府以外	
	(人)	(%)	(人)	(%)	(人)	(%)	(人)	(%)
歴史への興味	25	33.8	9	29.0	3	23.1	29	56.9
散歩・散策	43	58.1	14	45.2	2	15.4	3	5.9
古墳が好きだから	21	28.4	7	22.6	0	0.0	19	37.3
世界遺産への興味	10	13.5	4	12.9	8	61.5	23	45.1
観光	2	2.7	5	16.1	9	69.2	29	56.9
天皇陵への参拝	20	27.0	1	3.2	1	7.7	8	15.7
堺市博物館のそばだから	12	16.2	5	16.1	0	0.0	6	11.8
自然豊かだから	12	16.2	2	6.5	0	0.0	3	5.9
パワースポットだから	4	5.4	1	3.2	0	0.0	3	5.9
その他	6	8.1	7	22.6	4	30.8	2	3.9
回答者数	74	100.0	31	100.0	13	100.0	51	100.0

表 5 仁徳天皇陵古墳の訪問理由と初めて訪れた時期（単位：人）

初めて訪れた時期	回答者数	仁徳天皇陵古墳を訪れた理由 [複数回答可]									
		歴史への興味	散歩・散策	古墳が好きだから	世界遺産への興味	観光	天皇陵への参拝	堺市博物館のそばだから	自然豊かだから	パワースポットだから	その他
今回が初めて	68	29	10	14	32	36	7	3	4	3	8
2020～2022年	10	6	2	5	2	3	4	3	2	1	1
2017～2019年	9	4	4	4	1	1	2	1	1	2	1
2016年以前	82	29	49	25	12	5	17	17	11	2	10
回答者数	169	68	65	48	47	45	30	24	18	8	20

### (3) 仁徳天皇陵古墳のイメージ

それでは、訪問者は仁徳天皇陵古墳に対してどのようなイメージを抱いているのだろうか？ Q3 ではこれを確かめるために、回答者が抱く仁徳天皇陵古墳へのイメージに最も近いものを、「観光地」、「天皇陵（仁徳天皇のお墓）」、「古墳・文化財」、「世界遺産」、「地域のシンボル」、「パワースポット」、「森林・緑地」のなかから1つ選んでもらった。

筆者は仁徳天皇陵古墳に付与された主な意味として、①「観光地」、②「聖域」、③「文化財」、④「地域や国の誇りである世界遺産」を想定しているが、Q3の選択肢のうち「観光地」は①、「天皇陵（仁徳天皇のお墓）」は②、「古墳・文化財」は③、「世界遺産」と「地域のシンボル」は④に概ね対応する。

Q3への回答で最も多かったのが「天皇陵（仁徳天皇のお墓）」で34.1%、二番目が「古墳・文化財」が33.5%である。この2つで全体の約7割を占めている。ついで「世界遺産」と「地域のシンボル」が同数でそれぞれ13.9%を占める。「森林・緑地」、「観光地」、「パワースポット」と答えた人はいずれも少数にとどまる（表6）。

表6 仁徳天皇陵古墳のイメージ

	(人)	(%)
天皇陵（仁徳天皇のお墓）	59	34.1
古墳・文化財	58	33.5
世界遺産	24	13.9
地域のシンボル	24	13.9
森林・緑地	5	2.9
観光地	2	1.2
パワースポット	1	0.6
合計	173	100.0

次に、仁徳天皇陵古墳に対するイメージを居住地別に集計する（表7）。堺市在住の訪問者の間では、「天皇陵（仁徳天皇のお墓）」を挙げた人が34.2%で最も多い。ここを訪れる地元住民には、これを仁徳天皇の古墳（お墓）であると考え人が多いことが分かる。二番目は「地域のシンボル」の28.8%であった。このことから、地元では仁徳天皇陵古墳を「地域のシンボル」とする見方もある程度浸透していることが窺われる。堺市以外の居住者で「地域のシンボル」と答えた人はごくわずかであり、こうした見方はほぼ堺市民に限定されるとみてよい。

表7 居住地別にみた仁徳天皇陵古墳のイメージ

仁徳天皇陵古墳のイメージ	回答者数(人)	居住地							
		堺市		堺市に隣接する自治体		大阪府内のその他の自治体		大阪府以外	
		(人)	(%)	(人)	(%)	(人)	(%)	(人)	(%)
天皇陵(仁徳天皇のお墓)	56	25	34.2	10	32.3	5	38.5	16	31.4
古墳・文化財	56	15	20.5	10	32.3	5	38.5	26	51.0
世界遺産	24	8	11.0	7	22.6	2	15.4	7	13.7
地域のシンボル	24	21	28.8	2	6.5	0	0.0	1	2.0
その他の選択肢	8	4	5.5	2	6.5	1	7.7	1	2.0
回答者数	168	73	100.0	31	100.0	13	100.0	51	100.0

「堺市に隣接する自治体」と「大阪府のその他の自治体」からの訪問者では、「天皇陵（仁徳天皇のお墓）」と「古墳・文化財」という答えがそれぞれ同数で首位となったが、大阪府以外からの訪問者では、「古墳・文化財」と答えた人が51.0%にのぼり、「天皇陵（仁徳天皇のお墓）」(31.4%)よりも多い。

さらに、Q2で問うた仁徳天皇陵古墳への訪問理由（上位6位）ごとに、仁徳天皇陵古墳に対するイメージの割合をみてみよう。まず、「歴史への興味」で訪問した人の間で最も多かった仁徳天皇陵古墳のイメージは、「古墳・文化

財」で、45.6%を占めた。一方で、「天皇陵（仁徳天皇のお墓）」と答えた人も33.8%にのぼる（表8）。先述のように、歴史学界ではこの古墳の仁徳天皇陵としての治定が疑問視されているが、このことが歴史に関心のある訪問者には十分に浸透していない可能性がある。

「散歩・散策」目的で訪問した人には、「天皇陵（仁徳天皇のお墓）」や「地域のシンボル」、「古墳・文化財」というイメージを挙げた人が多い。天皇陵への参拝のために来訪した人は、半数以上が「天皇陵（仁徳天皇のお墓）」を選んでいる。

表8 訪問理由別にみた仁徳天皇陵古墳のイメージ

仁徳天皇陵古墳のイメージ	仁徳天皇陵古墳を訪れた理由（上位6位）〔複数回答可〕											
	歴史への興味		散歩・散策		古墳が好きだから		世界遺産への興味		観光		天皇陵への参拝	
	(人)	(%)	(人)	(%)	(人)	(%)	(人)	(%)	(人)	(%)	(人)	(%)
天皇陵(仁徳天皇のお墓)	23	33.8	17	26.6	14	29.2	19	40.4	14	31.1	16	53.3
古墳・文化財	31	45.6	15	23.4	22	45.8	16	34.0	20	44.4	6	20.0
世界遺産	5	7.4	11	17.2	2	4.2	9	19.1	8	17.8	1	3.3
地域のシンボル	7	10.3	17	26.6	8	16.7	3	6.4	1	2.2	6	20.0
その他の選択肢	2	2.9	4	6.3	2	4.2	0	0.0	2	4.4	1	3.3
回答者数	68	100.0	64	100.0	48	100.0	47	100.0	45	100.0	30	100.0

#### (4) 「観光」目的で訪問した人々の認識

Q3の結果で意外だったのは、仁徳天皇陵古墳のイメージとして「観光地」と答えた人がわずか2人（1.2%）にとどまったことである（表6）。先のQ2では訪問理由として「観光」を挙げた人は45人（25.9%）にのぼったが（表3）、Q3の結果はこれと一見矛盾するようにも思える。彼らは仁徳天皇陵古墳をどのように認識しているのだろうか？

「観光」を訪問理由と答えた人（45人）のうち、44.4%が仁徳天皇陵古墳のイメージとして「古墳・文化財」を挙げている。ついで31.1%が「天皇陵（仁

徳天皇のお墓)」、17.8%が「世界遺産」、4.4%が「森林・緑地」、2.2%が「地域のシンボル」と答えている（表8）。彼らのなかで、「観光地」をイメージとして挙げた人はいなかった。

彼らは、観光目的で、古墳・文化財もしくは世界遺産、天皇陵（である仁徳天皇陵古墳）へと訪れていることになる。こうした行為は、おそらく京都の拝観寺院への観光などと同じく、文化観光（もしくは宗教観光）と言うべきであろう。

先述のように、訪問理由を問う Q2 では複数回答が可能である。そこで、訪問理由を「観光」と回答した人のうち、ほかの理由も挙げた人について集計した。

訪問理由を「観光」と回答した人のうち、48.9%が「世界遺産への興味」も訪問理由として挙げている。ほかには「歴史への興味」を挙げた人が44.4%、「古墳が好きだから」が15.6%、「天皇陵への参拝」が13.3%などとなっている（表9）。彼らは観光目的の訪問者であり、文化財・世界遺産への関心や天皇・皇室への崇敬の念はそれほど明確ではないが、その多くはこうした感覚をいくらかは持ち合わせており、単なる娯楽（レジャー）めあての観光客ではない。

表9 訪問理由を「観光」と回答した人が挙げた  
「観光」以外の訪問理由（n=45）

	(人)	(%)		(人)	(%)
世界遺産への興味	22	48.9	堺市博物館のそばだから	5	11.1
歴史への興味	20	44.4	散歩・散策	4	8.9
古墳が好きだから	7	15.6	自然豊かだから	2	4.4
天皇陵への参拝	6	13.3	パワースポットだから	2	4.4

##### (5) 仁徳天皇陵古墳の呼称

「仁徳天皇陵古墳」とは世界遺産の登録名であり、文化庁や地元自治体でも主にこの呼称が用いられる。本研究でも便宜上そのように呼んでいるが、実際

には様々な呼称が存在する。天皇陵としての名称は、正式には「百舌鳥耳原中<sup>もずのみみはらのなかの</sup>陵<sup>みさぎ</sup>」だが、「仁徳天皇陵」と呼ばれることが多い。歴史学界（考古学界）ではこれを古墳として扱う立場から、被葬者名ではなく地名や地域での呼称を古墳名の基準とする原則に従って、仁徳天皇陵古墳は「大山古墳」や「大仙陵古墳」などと呼ばれる（橋本 2018、久世 2020：25～26 頁）。歴史学界では、この古墳を仁徳天皇陵として治定している宮内庁や、「仁徳天皇陵古墳」という呼称を用いた文化庁や地元自治体の姿勢が批判されている。「御陵」とは、天皇・皇后・皇太后・太皇太后の墓（陵）に対する敬称である。地元・堺市の住民のなかには、仁徳天皇陵古墳に対して親しみを込めて「御陵さん」や「仁徳さん」と呼ぶ人もいる（中井 1992：11～12 頁、文化庁 2018：162～163 頁）。

このように、仁徳天皇陵古墳は立場によって呼称が異なり、どのように呼ぶかが問題とされることもある。そこで Q4 では、仁徳天皇陵古墳の呼称にふさわしいと思うものを「仁徳天皇陵古墳」、「仁徳天皇陵」、「大山古墳」、「大仙陵古墳」、「御陵」、「仁徳さん」、「その他」、「呼称に関心はない」から 1 つ選んでもらった。

その結果、最も多かったのが「仁徳天皇陵」で 31.6%、ついで「仁徳天皇陵古墳」が 30.5%、「大山古墳」が 13.2%、「大仙陵古墳」が 8.0%、「仁徳さん」が 6.3%、「御陵」が 1.7% を占めた。訪問者の間では、歴史学界で用いられている呼称（大山古墳、大仙陵古墳）よりも、仁徳天皇の名を冠した呼称（仁徳天皇陵、仁徳天皇陵古墳）のほうが認知されているのが分かる。「呼称に関心はない」という人は 6.3% にとどまった（表 10）。

観光ガイドブックや観光案内所で配布されているリーフレットでは主に「仁徳天皇陵古墳」が用いられているにも関わらず、「仁徳天皇陵」が最多となったのはやや意外であった。これは、仁徳天皇陵古墳のイメージ（Q2）として「天皇陵（仁徳天皇のお墓）」が最多であったこと（表 6）と対応する。

表 10 仁徳天皇陵古墳にふさわしい呼称

	(人)	(%)
仁徳天皇陵	55	31.6
仁徳天皇陵古墳	53	30.5
大山古墳	23	13.2
大仙陵古墳	14	8.0
仁徳さん	11	6.3
御陵	3	1.7
その他	4	2.3
呼称に関心はない	11	6.3
合計	174	100.0

ふさわしい呼称を居住地別にみると、「仁徳天皇陵」・「仁徳天皇陵古墳」は各地域で多数を占めている。ただし堺市と隣接自治体の居住者においては「仁徳天皇陵」が首位であるのに対して、大阪府のその他の自治体と大阪府以外の居住者の間では「仁徳天皇陵古墳」が首位となっている。「仁徳さん」と回答した人は大半が堺市居住者で、同市の回答者全体の10.8%を占めている（表11）。

「呼称に関心がない」と答えた人は、堺市と隣接自治体の居住者が大半を占めており、その他の地域の居住者にはほとんどみられなかった。ここから窺えるのは、地元在住の訪問者のなかには仁徳天皇陵古墳そのものに対してあまり関心がなく、近場へ散歩や散策を目的に来ている人が一定数存在するということである。逆に、比較的遠方から来た人はおそらく仁徳天皇陵古墳への訪問動機が明確に存在し、そのため呼称にも一定の関心を抱いていることが推察される。

表 11 居住地別にみた仁徳天皇陵古墳にふさわしい呼称

呼称	回答者数 (人)	居住地							
		堺市		堺市に隣接する自治体		大阪府内のその他の自治体		大阪府以外	
		(人)	(%)	(人)	(%)	(人)	(%)	(人)	(%)
仁徳天皇陵	53	23	31.1	12	38.7	4	30.8	14	27.5
仁徳天皇陵古墳	52	21	28.4	8	25.8	5	38.5	18	35.3
大山古墳	22	6	8.1	3	9.7	2	15.4	11	21.6
大仙陵古墳	14	6	8.1	2	6.5	1	7.7	5	9.8
仁徳さん	11	8	10.8	2	6.5	0	0.0	1	2.0
御陵	2	2	2.7	0	0.0	0	0.0	0	0.0
その他	4	2	2.7	0	0.0	0	0.0	2	3.9
呼称に関心はない	11	6	8.1	4	12.9	1	7.7	0	0.0
回答者数	169	74	100.0	31	100.0	13	100.0	51	100.0

ふさわしい呼称を訪問理由（上位6位）別に区分集計すると、「仁徳天皇陵」・「仁徳天皇陵古墳」の割合はどの区分でも高いのが分かる（表12）。「歴史への興味」から訪問した人たちの間では、歴史学界で使われている「大山古墳」・「大仙陵古墳」の呼称を選んだ割合が他の区分と比べて高い。しかし彼らの間でも、被葬者名を冠した呼称である「仁徳天皇陵」・「仁徳天皇陵古墳」をふさわしいと考えている人が半数以上にのぼる。

「散歩・散策」目的の訪問者には、「仁徳さん」と「呼称に関心がない」とした人の割合が比較的高い。これは地元居住者が多いためとみられる。「世界遺産への興味」で訪問した人のなかでは、世界遺産の登録名である「仁徳天皇陵古墳」を選んだ人の割合がとりわけ高い。「観光」で訪問した人の間でも同様の傾向がみられる。一方、天皇陵への参拝のために来訪した人は、半数以上が「仁徳天皇陵」を選んでおり、逆に「大山古墳」・「大仙陵古墳」の割合は低い。

表 12 訪問理由別にみた仁徳天皇陵古墳にふさわしい呼称

呼称	仁徳天皇陵古墳を訪れた理由（上位6位）〔複数回答可〕											
	歴史への興味		散歩・散策		古墳が好きだから		世界遺産への興味		観光		天皇陵への参拝	
	(人)	(%)	(人)	(%)	(人)	(%)	(人)	(%)	(人)	(%)	(人)	(%)
仁徳天皇陵	16	23.5	24	36.9	15	31.3	13	27.7	12	26.7	16	53.3
仁徳天皇陵古墳	23	33.8	16	24.6	13	27.1	21	44.7	17	37.8	8	26.7
大山古墳	13	19.1	5	7.7	13	27.1	5	10.6	7	15.6	2	6.7
大仙陵古墳	9	13.2	3	4.6	3	6.3	5	10.6	4	8.9	2	6.7
仁徳さん	3	4.4	8	12.3	2	4.2	0	0.0	1	2.2	1	3.3
御陵	1	1.5	1	1.5	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
その他	2	2.9	1	1.5	2	4.2	2	4.3	2	4.4	1	3.3
呼称に関心はない	1	1.5	7	10.8	0	0.0	1	2.1	2	4.4	0	0.0
回答者数	68	100.0	65	100.0	48	100.0	47	100.0	45	100.0	30	100.0

さらに、仁徳天皇陵古墳のイメージと呼称との関係を分析する。仁徳天皇陵古墳を「天皇陵」や「地域のシンボル」とみなす人たちの間では、「仁徳天皇陵」がふさわしい呼称だと考える人の割合が最も高い（表 13）。

仁徳天皇陵古墳を「古墳・文化財」と捉える人たちの間では、「大山古墳」をふさわしい呼称とみなす人が最も多く、25.9%を占めている。しかし、2位の「仁徳天皇陵古墳」（24.1%）とは僅差であり、以下「仁徳天皇陵」（20.7%）、「大山古墳」（13.8%）が続く。歴史学界で用いられている「大山古墳」・「大仙陵古墳」を選んだのはあわせて約4割に過ぎず、「仁徳天皇陵」・「仁徳天皇陵古墳」の割合の合計を下回っている。

仁徳天皇陵古墳のイメージとして「世界遺産」を選んだ人たちのうち半数は、「仁徳天皇陵古墳」が呼称として最もふさわしいと答えている。

表 13 仁徳天皇陵古墳のイメージとふさわしい呼称

呼称	回答者数 (人)	仁徳天皇陵古墳のイメージ									
		天皇陵		古墳・文化財		世界遺産		地域のシンボル		その他の選択肢	
		(人)	(%)	(人)	(%)	(人)	(%)	(人)	(%)	(人)	(%)
仁徳天皇陵	55	27	45.8	12	20.7	6	25.0	10	41.7	0	0.0
仁徳天皇陵古墳	53	21	35.6	14	24.1	12	50.0	4	16.7	2	25.0
大山古墳	23	2	3.4	15	25.9	3	12.5	1	4.2	2	25.0
大仙陵古墳	14	4	6.8	8	13.8	1	4.2	1	4.2	0	0.0
仁徳さん	11	3	5.1	3	5.2	0	0.0	3	12.5	2	25.0
御陵	3	2	3.4	1	1.7	0	0.0	0	0.0	0	0.0
その他	4	0	0.0	0	0.0	1	4.2	3	12.5	0	0.0
呼称に関心はない	10	0	0.0	5	8.6	1	4.2	2	8.3	2	25.0
回答者数	173	59	100.0	58	100.0	24	100.0	24	100.0	8	100.0

#### (6) 仁徳天皇陵古墳での行動

Q5では、今回、仁徳天皇陵古墳で行ったことを質問した。この問いでは、「拝礼」、「ガイドの説明を聞く」、「写真撮影」、「該当するものはない」という選択肢から、あてはまるものをすべて選んでもらった。なお、ここでいう「ガイド」とは、拝所の前に常駐している堺観光協会のボランティアガイドのことである。

結果は、「拝礼」が50.0%、「写真撮影」が39.7%、「ガイドの説明を聞く」が22.4%、「該当するものはない」が25.9%であった（表14）。とりわけ訪問者の半数が拝礼を行ったことが注目される。拝礼はそれ自体が必ずしも宗教行為で

表 14 仁徳天皇陵古墳での行動 [複数回答可] (n=174)

	(人)	(%)
拝礼	87	50.0
写真撮影	69	39.7
ガイドの説明を聞く	39	22.4
該当するものはない	45	25.9

あるとはいえないが、そこに眠るとされる死者に対する行為であるのは間違いない。拝礼を行った人は、ここを死者の眠る墓所、いかえれば霊的な場所や聖域と認識し、行動しているといえる。

ところが、拝礼を行った人（87人）のうち、Q3で仁徳天皇陵古墳のイメージとして「天皇陵（仁徳天皇のお墓）」を挙げた人は36人に過ぎない。つまり、拝礼を行った人は、必ずしもここが仁徳天皇のお墓だと考えていない。

一方で、仁徳天皇陵古墳のイメージとして「古墳・文化財」を挙げた人のうち、46.6%が拝礼を行っている（表15）。つまり、ここを「仁徳天皇陵（仁徳天皇のお墓）」というよりも「古墳・文化財」であると認識したうえで拝礼した人が少なからず存在することになる。彼らは、（歴史学界の通説に従って）この古墳の被葬者が仁徳天皇であることは否定するが、それ以外の誰かのお墓（古墳）とみなして拝礼したのかもしれない<sup>5)</sup>。仁徳天皇陵古墳に対しては立場によって様々な意味づけがなされているが、そうした違いを超えて、多くの人々が拝礼していることは注目に値する。その一方で、仁徳天皇陵古墳のイメージとして「天皇陵（仁徳天皇のお墓）」を挙げた人でも、約4割は拝礼を行っていない。

表 15 仁徳天皇陵古墳での行動とイメージ

仁徳天皇陵古墳 での行動 〔複数回答可〕	回答 者数 (人)	仁徳天皇陵古墳のイメージ									
		天皇陵(仁徳 天皇のお墓) (n=59)		古墳・ 文化財 (n=58)		世界遺産 (n=24)		地域の シンボル (n=24)		その他の 選択肢 (n=8)	
		(人)	(%)	(人)	(%)	(人)	(%)	(人)	(%)	(人)	(%)
拝礼	87	36	61.0	27	46.6	12	50.0	11	45.8	1	12.5
写真撮影	69	24	40.7	30	51.7	11	45.8	2	8.3	2	25.0
ガイドの説明を聞く	39	17	28.8	14	24.1	6	25.0	2	8.3	0	0.0
該当するものはない	44	9	15.3	16	27.6	3	12.5	10	41.7	6	75.0

このように、仁徳天皇陵古墳で拝礼する人と、そこを「仁徳天皇陵（仁徳天皇のお墓）」と捉えている人が一致する訳ではない。拝礼している人でも、そこを仁徳天皇以外の人物のお墓と捉えている可能性がある。また、そこを天皇陵や仁徳天皇のお墓とみなしている人でも、拝礼をしない人もいる。

さらに、仁徳天皇陵古墳での行動と訪問理由（上位6位）との関係について考える。「天皇陵への参拝」のために訪れた人の中では、拝礼を行う割合が90.0%で最も高い（表16）。この割合が最も低いのは「散歩・散策」で訪れた人たちだが、それでも46.2%が拝礼を行っている。彼らのうち「該当するものはない」と答えたのは40.0%で、ほかの訪問理由の人々と比べて高い。

「歴史への興味」から訪問した人のうち、拝礼を行ったのは57.4%である。「歴史への興味」、「古墳が好きだから」、「世界遺産への興味」を理由に訪問した人は、それぞれ約3割がガイドの説明を聞いている。

「観光」目的で訪れた人のうち、拝礼を行った割合は48.9%と、比較的低い値になっている。一方、写真撮影を行った人は60.0%にのぼる。「散歩・散策」目的の訪問者は、写真を撮影したりガイドの説明を聞いたりする人の割合が少ない。

表 16 訪問理由別にみた仁徳天皇陵古墳での行動

仁徳天皇陵古墳での行動 [複数回答可]	仁徳天皇陵古墳を訪れた理由（上位6位） [複数回答可]											
	歴史への興味 (n=68)		散歩・散策 (n=65)		古墳が好きだから (n=48)		世界遺産への興味 (n=47)		観光 (n=45)		天皇陵への参拝 (n=30)	
	(人)	(%)	(人)	(%)	(人)	(%)	(人)	(%)	(人)	(%)	(人)	(%)
拝礼	39	57.4	30	46.2	34	70.8	32	68.1	22	48.9	27	90.0
写真撮影	35	51.5	11	16.9	24	50.0	24	51.1	27	60.0	12	40.0
ガイドの説明を聞く	22	32.4	8	12.3	14	29.2	15	31.9	9	20.0	8	26.7
該当するものはない	11	16.2	26	40.0	4	8.3	5	10.6	8	17.8	2	6.7

#### 4. おわりに

筆者は仁徳天皇陵古墳に付与された主な意味として①「観光地」、②「聖域」、③「文化財」、④「地域や国の誇りである世界遺産」を想定し、仁徳天皇陵古墳の訪問者に対してアンケート調査を実施して、同古墳に対する訪問者の認識や目的、行動を分析した。

回答を寄せた訪問者は地元の堺市住民が約4割を占めるが、大阪府外から来た人も約3割にのぼる。平均年齢は53.1歳で、日本人の平均年齢47.7歳（令和2年国勢調査報告）よりはやや高めだが、年齢層は幅広く、男女比もほぼ半々である。一般に、考古学ファンの人々は高年齢層の男性が多いとされるが（「古墳ブームにみる遺跡活用の将来像」研究グループ2017：32頁）、仁徳天皇陵古墳の訪問者にはそうした傾向が希薄である。

訪問者のうち、地元の堺市在住者の約7割が2016年以前から訪れているのに対し、大阪府外から来た人の約8割は今回が初めての訪問であった。

仁徳天皇陵古墳への訪問理由として回答者の1割以上が挙げたのは、「歴史への興味」、「散歩・散策」、「古墳が好きだから」、「世界遺産への興味」、「観光」、「天皇陵への参拝」、「堺市博物館のそばだから」、「自然豊かだから」である。このことから、訪問者は多様な動機で仁徳天皇陵古墳を訪れているのが分かる。

仁徳天皇陵古墳のイメージとして、「天皇陵（仁徳天皇のお墓）」、「古墳・文化財」、「世界遺産」、「地域のシンボル」の上位4つを挙げた人が合計で全体の95.4%におよんだ。「天皇陵（仁徳天皇のお墓）」は上記の②、「古墳・文化財」は③、「世界遺産」と「地域のシンボル」は④に相当する。

一方、①に相当する「観光地」をイメージとして選んだ訪問者は非常に少なかった。しかし、訪問者のおよそ4人に1人が訪問理由を「観光」と答えている。彼らのような観光客からみても、仁徳天皇陵古墳は「古墳・文化財」もし

くは「天皇陵（仁徳天皇のお墓）」、「世界遺産」なのであり、「観光地」というイメージはほとんどない。筆者はこれまで、観光客や観光業界の人々が同古墳を「観光地」として意味づけていると考えてきたが、観光客については見方を改めたい。

堺市在住の訪問者のうち、イメージとして「地域のシンボル」を挙げた人は3割近くに達した。堺市役所は「堺市にとって世界遺産登録は、資産を将来にわたって守り伝えるとともに、地域への誇りと愛着が醸成されることにより、人々が住みやすく訪れやすい歴史と文化の溢れる街にしていくことを目的としている」と表明しているが（堺市文化観光局世界文化遺産推進室 2019）、こうした理解が仁徳天皇陵古墳を訪れる地元住民にある程度浸透していることが窺える。

堺市在住の訪問者のおよそ3人に1人は、仁徳天皇陵古墳へのイメージとして「天皇陵（仁徳天皇のお墓）」を挙げている。約1割の人は同古墳を「仁徳さん」と親しみをこめて呼んでいる。一方、大阪府外からの訪問者は、過半数が「古墳・文化財」とのイメージを持っている。

歴史学界（考古学界）では、仁徳天皇陵の治定が疑問視されている。しかし、仁徳天皇陵古墳を「歴史への興味」で訪問した人のうち、そのイメージとして「古墳・文化財」を挙げたのは半数弱にとどまり、約3分の1が「天皇陵（仁徳天皇のお墓）」と答えた。筆者はこれまで、歴史学者（考古学者）や考古学ファンがともに仁徳天皇陵古墳を文化財とみなしていると考えていたが、学界の見解は考古学ファンには必ずしも十分に浸透しておらず、両者の間に認識のずれが存在する可能性がある。

訪問者の間では、歴史学界で用いられている呼称（大山古墳、大仙陵古墳）よりも、仁徳天皇の名を冠した呼称（仁徳天皇陵、仁徳天皇陵古墳）のほうが浸透している。仁徳天皇陵古墳の呼称は立場によって異なるが、これを「天皇陵」や「地域のシンボル」とみなす訪問者には、「仁徳天皇陵」がふさわしい

呼称だと考える人が多い。一方、仁徳天皇陵古墳を「古墳・文化財」と捉える訪問者には、「大山古墳」をふさわしい呼称とみなす人が最も多い。しかし、歴史学界で用いられている呼称を選んだのはあわせて約4割に過ぎず、仁徳天皇の名を冠した呼称の割合の合計を下回っている。

仁徳天皇陵古墳の訪問者の半数が拝礼を行っていた。拝礼を行った人は、仁徳天皇陵古墳を「天皇陵（仁徳天皇のお墓）」とみなす人以外にも多数存在する。拝礼を行った人は、ここを死者の眠る霊的な場所や聖域と認識し、行動しているといえる。しかし、拝礼している人でも、そこを仁徳天皇以外の人物のお墓と捉えている可能性がある。また、そこを天皇陵や仁徳天皇のお墓とみなしている人でも、拝礼をしない人もいる。

筆者はこれまで、仁徳天皇陵古墳を「聖域」とみなす人々は、主に皇室・宮内庁や神社関係者・皇室崇敬者であると考えてきた。しかし、仁徳天皇陵古墳を文化財や世界遺産、地域のシンボルとみなす人たちの間でも、ここを死者の眠る「聖域」と捉え、拝礼している人が少なからず存在することに留意する必要がある。

今後は、仁徳天皇陵古墳に関わる人々への聞き取りの結果をとおして、同古墳に付与された意味に関してさらに検討を進めていきたい。

#### <付記>

今回アンケートにご回答いただいた皆様、ならびにアンケート調査にご協力いただいた堺市世界遺産課、百舌鳥古墳群ビジターセンター、堺市博物館、こぶん前 cafe IROHA の皆様に対し感謝を申し上げます。本研究は、JSPS 科研費（課題番号：19K12572）の助成と福岡大学の研究助成（課題番号：214001）を受けた。本稿の概要は、2023年9月に関西大学で開催された日本地理学会秋季学術大会において発表した。

### <注>

- 1) 本研究では、古代史に関するシンポジウムや遺跡の現地説明会に参加したり、考古学者・古代史学者の著作物を積極的に読んだりする人々を「考古学ファン」と呼んでいる。彼らは歴史学（考古学）の言説に対して親和的であると考えられる。
- 2) 正確に言えば、仁徳天皇陵の拝所には「一般拝所」・「特別拝所」・「御拝所」がある。一番手前にある一般拝所は誰でも立ち入ることができるが、その奥にある特別拝所と御拝所には限られた人しか入れない。御拝所には鳥居と灯籠がある。いずれも宮内庁が管理している（福尾 2019：157～158 頁）。本稿で単に「拝所」と言う場合は一般拝所を指す。
- 3) 一部の質問項目に回答しなかった人を含む、回答者全員の人数。
- 4) 日本では 2000 年代以降、様々な場所に聖地が乱立するようになった。宗教学者の岡本亮輔は、こうした状況を「パワースポット・ブーム」と呼んでいる（岡本 2015：151～152 頁）。岡本によれば、「パワースポット」という言葉（和製英語）は、何となく癒される場所、元気がもらえる場所、幸運に恵まれそうな場所といった意味で使われている。この言葉は特定宗教を連想させず、中立的な語感をもつ（岡本 2017：72 頁）。
- 5) 古墳は現代社会においても信仰、礼拝、参拝の対象となりうる。その意味で、古墳は他の遺跡・遺構と異なる（岡村 2014：44 頁）。

### <文献>

- 大阪歴史学会・京都民科歴史部会・考古学研究会・古代学研究会・史学会・地方史研究協議会・奈良歴史研究会・日本考古学協会・日本史研究会・日本歴史学協会・文化財保存全国協議会・歴史科学協議会・歴史学研究会・歴史教育者協議会（2019）「百舌鳥・古市古墳群の世界文化遺産登録決定に関する見解」、『考古学研究』66-3、18 頁
- 岡村勝行（2014）「古墳時代と市民社会」、一瀬和夫・福永伸哉・北條芳隆編『古墳時代の考古学 10 古墳と現代社会』同成社、43～56 頁
- 岡村勝行（2022）「文化財の活用論を超えて」、『日本史研究』717、3～16 頁
- 岡本亮輔（2015）『聖地巡礼』中央公論新社
- 岡本亮輔（2017）「パワースポットめぐり—伝統と観光が衝突する場所—」、高山陽子編『多文化時代の観光学—フィールドワークからのアプローチ—』ミネルヴァ書房、

71～86 頁

久世仁士（2020）『百舌鳥古墳群をあるく—巨大古墳・全案内—増補改訂第2版』創元社  
「古墳ブームにみる遺跡活用の将来像」研究グループ編・発行（2017）『「古墳ブームに  
みる遺跡活用の将来像」研究成果報告書』

<https://hdl.handle.net/11094/68089>（2023年9月1日閲覧）

堺市文化観光局世界文化遺産推進室（2019）「百舌鳥・古市古墳群 世界遺産登録のあ  
ゆみ—堺市の取組みを中心にして—」、『文化遺産の世界』35

[https://www.isan-no-sekai.jp/feature/35\\_05](https://www.isan-no-sekai.jp/feature/35_05)（2023年9月1日閲覧）

堺都市政策研究所編・発行（2017）『「百舌鳥・古市古墳群」世界文化遺産登録による経  
済波及効果』

白形俊明・藤田茂行・宮前 誠（2013）「世界遺産に向けた地元自治体の課題」、五十嵐  
敬喜・岩槻邦男・西村幸夫・松浦晃一郎編『古墳文化の煌めき—百舌鳥・古市古墳  
群を世界遺産に—』ブックエンド、136～150 頁

中井正弘（1992）『仁徳陵—この巨大な謎—』創元社

橋本達也（2018）「天皇陵古墳の呼称—仁徳陵古墳・大山古墳・大仙陵古墳・大仙古墳・  
仁徳天皇陵古墳をめぐって—」、大阪大学考古学研究室編・発行『大阪大学考古学  
研究室 30 周年記念論集』、45～63 頁

福尾正彦（2019）『陵墓研究の道標』山川出版社

藤村健一（2021a）「世界遺産「百舌鳥・古市古墳群」の天皇陵古墳に付与された「聖域」  
としての意味—宮内庁、皇室、神社関係者の視点を中心にして—」、『立命館文学』  
672、220～235 頁。

藤村健一（2021b）「世界遺産「百舌鳥・古市古墳群」の天皇陵古墳に付与された意味」、  
『考古学ジャーナル』751、39～43 頁

文化庁編・発行（2018）『百舌鳥・古市古墳群—古代日本の墳墓群—』（世界遺産登録推  
薦書）

[https://bunka.nii.ac.jp/docs/special\\_content/recommendation/19\\_mozu\\_furuichi.pdf](https://bunka.nii.ac.jp/docs/special_content/recommendation/19_mozu_furuichi.pdf)  
pdf（2023年9月1日閲覧）

松田 陽（2013）「パブリック・アーケオロジーの観点から見た考古学、文化財、文化  
遺産」、『考古学研究』60-2、19～33 頁